





農村の疲弊極點

# 小學教員の俸給も拂へぬ

霜害で四五月只勤

福島全縣下の窮狀

兵隊の麥刈り演習

松山歩兵二十二聯隊では六月九日

ら十五日まで松山附近を中心

に最も勤務者以外全部出勤して事

限の營内勤務者を爲す管

刈取の演習を爲す管

女人禁制の

高野山に尼僧學校

紀州高野山修道院は真言宗寺院徒

で事故に依り制規の學科を履修せし

る者を收容し特別試験に必

要なる學業を

未だ傳燈第及宗派其他須要なる學業

を授くる爲め大正十一年四月現高野修

院大學生長岡圓師を院長とし一ヶ月制

で實踐院に設置したが既に四十餘年

の卒業生を出し現在院生は三十名

あるが更に本年より尼僧部を設立し

月一日金剛峯寺法務所の諸員參列し

て其開院式を舉げた本年の入學者

も三度上りがり水不足の爲市民は困難

としてゐる

してゐる

新議會初血の雨

海軍飛行增加案

財部、海相は議會に於て海軍航空隊は

大正十八八年度までに廿八隊に増加す

る意向であると宣言した

豊吉君が論争の果て互に拳固を固め

て闘合ひを演じ田淵君はしたか

に鐵拳を見舞はれ出血する程の騒ぎ

を惹き起した

最初の鮮人醫學博士

十九歳の青年

六月十一日九大陸學部教授會では伊

治術、淺田爲義、河野亮太郎、井利

眞の四氏に對して醫學博士の學位を

授與することに決定したが、このう

ち伊弉諾は朝鮮咸鏡南道長澤郡北面の

折柄猛火は全村を一晩めにし家屋十

戸焼失した後同村は養蚕の上族中のも

らであらう

つて來たが先般の霜害によつて一層深刻化されやうとして居るので縣當局は各部長に對して其

對策を講せしめて居る一方、未だ俸給を支拂はざる町村の調査を命じて居るが小學校教員の恐怖時代は今後益擴大して来るだらうと言はれて居る、縣に達した各郡の報告書によれば、中六月十六日迄に到着した郡の中三月以後五月至るまで未だに俸給を支拂はない町村は左の如くであるが

報告の到着しない郡の中にも相當

未拂の町村がある様様である

東京電報 北米通信

河野郡平里組合、飯石、常葉、原川、三四五、三箇月、田村瀬川、小泉深石、鶴路

▲安達郡木澤、白岩、仁井田、四五兩月

▲石川郡小平、山崎、四五兩月

▲沼田郡木澤、石橋組合（五

▲相馬郡山上、宮野組合、飯石、石橋組合（五

▲安達郡木澤、白岩、仁井田、四五兩月

▲沼田郡木澤、石橋組合（五

▲沼田郡木澤、石橋組合（五

▲沼田郡木澤、石橋組合（五

▲沼田郡木澤、石橋組合（五

▲沼田郡木澤、石橋組合（五

▲沼田郡木澤、石橋組合（五

▲沼田郡木澤、石橋組合（五

▲沼田郡木澤、石橋組合（五

海軍飛行增加案

開會後間もなく衆議院休憩室

で憲政會の田中萬選者は中立の田淵

署も近年稀なる暑さで既に平年より

三度上りがり水不足の爲市民は困難

としてゐる

新議會初血の雨

海軍飛行增加案

財部、海相は議會に於て海軍航空隊は

大正十八八年度までに廿八隊に増加す

る意向であると宣言した

豊吉君が論争の果て互に拳固を固め

て闘合ひを演じ田淵君はしたか

に鐵拳を見舞はれ出血する程の騒ぎ

を惹き起した

最初の鮮人醫學博士

十九歳の青年

六月十一日九大陸學部教授會では伊

治術、淺田爲義、河野亮太郎、井利

眞の四氏に對して醫學博士の學位を

授與することに決定したが、このう

ち伊弉諾は朝鮮咸鏡南道長澤郡北面の

折柄猛火は全村を一晩めにし家屋十

戸焼失した後同村は養蚕の上族中のも

らであらう

つて來たが先般の霜害によつて一層

深刻化されやうとして居るので縣當

局は各部長に對して其

對策を講せしめて居る一方、未だ俸給を支拂はざる町村の調査を命じて居るが小學校教員の恐怖時代は今後益擴大して来るだらうと言はれて居る、縣に達した各郡の報告書によれば、中六月十六日迄に到着した郡の中三月以後五月至るまで未だに俸給を支拂はない町村は左の如くであるが

報告の到着しない郡の中にも相當

未拂の町村がある様様である

東京電報 北米通信

河野郡平里組合、飯石、常葉、原川、三四五、三箇月、田村瀬川、小泉深石、鶴路

▲安達郡木澤、白岩、仁井田、四五兩月

▲石川郡小平、山崎、四五兩月

▲沼田郡木澤、石橋組合（五

▲沼田郡木澤、石





## 大石内藏之助

牛井桃水

百八十一回

大石内藏の助は、お前の前後、市中を騒がす段、向ひある者の仰に仰に御座れど、將軍家に向ひ、弓を引くと申すではない左様の事まで心を使ひ、遅延遅延致しては一舉を果す時は参らぬ、世上の大石内藏の助は、如何御座らうと、「君のおん爲め、義憲を晴らすが我々の宿望、其の本懐だに達しますれば、後日何と申されうと、厭ふ處は御座りませりませう」と動かぬ決心の色を示した。

「我等眞知致した處では、上州も日本中は、隨に本所へ居られる筈、五信半日中の茶會を見過しても、討入の機会は必ず御座る、萬がないとしても十九日は節分、其の夜は必定在現で御座らう、さかく此の年内に、本意を述べるといふ事は、「亡君尊靈も照覧あれ、内藏の助は誓言致す、六日將軍御成りに付て、警戒も嚴重な、五日の夜に事を擧げ、仕損じた如めさる」と胸が辭色を晦ました。

「斯程までに心を碎き、仕損するな隨に御座るので、措者も合羽を引欄ひ御頭笠を戴之助は唯七を顧んで、自ら屋敷の「足下は不忠の臣なりたいか、人供廻りの者も滿ひ、上杉の下屋敷さらば所謂天命放て、悔ゆる處は御座りませぬ」と武林唯七は嘆んだ。内蔵の爲すべき處で御座るぞ、自ら屋敷の「亡君御最期の快取る爲めならば、亡君御死して、も相済む事、同じ一命を擧つても、忠を願うては、亡君の御名を辱めず、御一開き、内より立出ました人は、英御類に累を及ぼさず、流石は内所頭紋付の小袖を着し、白髪まじりの總殿の家來程ある、均しく仇を報するにも、最善の道を盡し、好くも致しましたやゑたこの後の世まで、美名を遺すが智謀ます」といつた。

「仕損じさせば、亡君のおん恥辱にも相成りますまい、既に我黨に付、同心致した人々へ、今晚の次決死の者十餘名まかり在る、萬々も及ばぬ次第、的なきに矢は放され仕損じる事は御座りませぬ」と安兵衛は苦笑したが、律義一術揚大夫等は辭し去つた。

柄はきつぱり答へた。

此時列席の大高源吾は、いつの間にか中座したが、やがて慌しく立歸り、

「唯今宗連の處から、此の手紙が到來致した、お聞下されう、讀上げま

す」

明五日吉良家に於て茶會被爲儀

老御招きに預かり居候處俄かに御

様がほど相成候、孰ては在庵まか

り在候間御出可被下待候以上

師走四日

脇屋新兵衛様

大高源吾が手紙を聞いて、一座半

神崎與五郎は評定の席に通つて次

事柄を報告した。

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*